

1 枕の上をわが血の流る

佐藤 喜一

四月から、血液透析患者になった。

動脈硬化に起因する腎不全とのことで、週三回、通院して治療に専念している。以前から要注意ではあった。自発的に定期検診を受け、ボディチェックはしていたつもりだが、腎機能の低下にはあまり注意しなかった。その数値は血液中のクレアチニンの漸増のよって知ってはいたものの、それほど気にとめていなかったのだ。

昨年の暮れに数値が7を超えた。警戒警報が出た。あれやこれや迷ったが、透析の必要条件であるシャント作りの手術を、一月末に受けた。これは、左腕の静脈と動脈とを繋いで血流を良くし、透析をスムーズにさせるための措置だ。二晩ほど入院した。

顔色もいい、むくみもない、ということと、透析導入には二か月ほど猶予があった。その間に、徐々に心の準備もできた。週に三回囚われの身になるのも、80歳、致し方なからうと諦めた。

こんな唄が甦った。昭和48年に八代亜紀がヒットさせた「なみだ恋」(悠木圭子詞)という唄。「一夜の新宿 裏通り 肩を寄せあう 通り雨……」。長年勤務先が母校である都立新宿高校だったので、昼夜をわかつた新宿がホームグラウンドだった。「肩を寄せあう」とか、「何故か今夜は 帰したくない……」なんていう佳いひとには、まったくご縁はなかったが、ネオン河の水を飲み、S1よろしく紫煙を吐いて気炎をあげていたのだから、それなりに傷みも激しくなつたんだろうと思つて、決意した。

四月八日から調布の本院で導入開始。十五日に退院、十八日からは家に近い分院で通院による透析が始まった。近いといっても歩けば二十分。バスに乗れば十五分。火・木・土の朝は7時に起きて9時前には着くようにバスに乗る。9時30分前後に穿刺。三時間ほどベッドにハリツケ? になる。

テレビも見られる。本なども読みたい。だが、まだ慣れないのでじつとガマンの子になつて妄想に耽つている。森嶋外さんだったら「……多くの師には逢つたが、一人の主には逢わなかつたのである。」(「妄想」へ明治44)などという名言が浮かぶのだろうけれど、凡夫はとりとめのないことばかり考えている。

静脈と動脈にそれぞれ針を指す。動脈からの血液がカミラインという透析専用のビニールパイプを通過して、ダイアライザーという浄化装置を通つて、本来は腎臓が処理すべき体内の老廃物や水分を除去してくれ、静脈に戻る。一分間になんと1800C程が流れるという。とすると、三時間だつたら何回転するんだろう? などと頭の上の透析装置を往來するわが血液を眺めては、少々ドッキリとする。

終わると一応はホツとするけれど、実施前に痛みなどの自覚症状がないものだから、スツキリしたというよりも、やれやれ疲れたなというかんじ。帰宅して昼食を終えると何となく眠くなる。一日中呆けているかんじ。そう担当医に言つたら、初心者だからしずかに走つていいんですよ、優しく論された。80にして初心者とは? 少々妙な気もする。

それと、透折患者には「障害者手帳」なるものが配布される。それも「一級」だ。生涯
叙勲などとは関係ない輩だから、「一級」ありがたく頂戴した。

そろそろ終末も近い「初心者」、昔ながらのアスベストの天井板を見つめながら、いろ
んなこと、とりとめもなく考えている。

——今は元気で自分の足でここまで来られるけど、足腰立たなくなったらどうする？
とか、

——ある日、突然、「オレもういいよ。もうなんにもしないで、尿管症にでもなって、
旅立ちを早めるか」なんて思うんじゃないか。

とか、

——透折中、血圧がどんどん低下する。そしてそのまま意識不明で、息絶えるのでは？
とか、

——在原業平の歌にこんなのがあった。

つひに行く道とはかたえて知りしかど 昨日今日とは思はざりしを

そう、そんなにとおくはないんだよ……

とか、

——終末の刻を予測して、お前、吉村昭さんのように自らの手で針を抜けるか？
などなどと、思ったりしている。

そんな思いに揺れているとき、一つの救いになるのが看護師さんたちの動きだ。実に生
き生きとしている。必ず「……さん」と声をかけ、「大丈夫よ！」と励ましてくれる。身
のこなしが軽やかでてきぱきと仕事を処理する。男性、女性をとわずすがすがしい。

通院先だけでなく、調布の本院もそうだった。医療法人の理事長は創始者（故人）の娘
さんで、私の主治医でもあったが、若々しく気さくな方だった。動きも敏捷でクランケに
それとなく元気を与えてくれる医師だった。「顔色、いいじゃないの！」と言われて、救
われる思いのしたこともあった。

医師はもちろんのことだが、看護師・臨床技士さんたち、この方々は目立たないけれど
日本を強く支えている人たちだな、とつくづく思う。あなたたちは毎日同じような繰り返し返
しをしていますが、しっかりと患者を支えてくれている、と、ひそかに私は頭を下げる。日
の当たるギャルグルーブなどは、比べものにならない貴重な存在だと感謝している。

ふつと吉井 勇（明治19〜昭和35）という歌人のこんな一首が浮かんだ。

かにかくに祇園はこひし ぬる（寝る）ときも枕の下を水のながるる

祇園など縁なき衆生だが、いい歌だ。「月はおぼろに 東山……」（長田幹彦詞）なん
という唄が浮かんでくる。私の生まれた昭和5年の唄だ。

先人のうたに誘われて、一句出来た。

透折や 枕の上を 血の流る

されど、「そう簡単に逝けるかよ！」という気持ちでいる。

枕の上の赤い血は、わが執念の焰かもしれない。